

ヒツジの名称体系

——イラク共和国ハムリン盆地の定住農牧民の場合——

篠原 徹

はじめに

1. ヒツジの放牧
2. ヒツジの名称体系

3. 個体識別とヒツジ・サル・ウシ

おわりに

論文要旨

人と関わる動物が群れをなしている場合、人はその個体差をどう弁別して分類し命名しているのだろうか。この問題をイラク・ハムリン盆地の定住農牧民の牧童、日本の霊長類研究者および徳之島の闘牛を楽しむ人々を例にとり、分類と命名の論理の特徴を抽出した。対象となる動物は家畜としてのヒツジ、野生のニホンザル、闘牛用のウシの3種である。ヒツジを分類する論理は植物の検索表に使われる二分法の原理と類似しており、それは形態差に基づくものである。類別され名称を与えられたヒツジは単独な個体を指示するのではなく、ある条件を満たす個体の集合で代替可能な存在である。それに対してニホンザル・ウシの命名は個体識別に基づいた個体の個性を認めた分類であり、代替不可能な単独な個体を指示する。

命名に関する民俗的分類思考にリンネ式二名法に類似するものと個体識別法に類似するものの存在が考えられる。ヒツジの体色のパターンと耳の長さによる民俗的なリンネ式二名法ではヒツジの性格や行動の特徴は捨象される。けれども日本では民俗的なリンネ式二名法はみられず、動物にパーソナリティを認める個体識別法は霊長類研究者に固有のものではなく民俗のレベルにも存在することを示唆した。この同一種の個体差に関する認識の差異が彼我の動物観の差異となって反映しているのではないか。